

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十六回 マルクス・レーニン思想の破綻（その六）

南出喜久治（令和6年11月15日記す）

【マルクス主義の本質 その2】

まづ、マルクスが前提とした唯物論は、分子、原子によって物質が組成されており、それ以上は物質として細分化されないとの仮説であつて、それが、原子の核分裂によって吹つ飛んだ。

原子、分子で組成される物質の前提が否定されたからである。

物質がエネルギーに転換し、エネルギーが物質として結実する現象が明らかになつたためである。

質量保存の法則が破綻し、エネルギー保存の法則が正しいとされたことによつて、唯物論の根底が否定された。世界を構成する究極的な存在は、物質だけでなく、エネルギーといふ目に見えないものもあるといふことであり、物質やエネルギーは、すべて波動であると認識されたのである。さうすると、この唯物論と対立してきた唯心論、つまり、世界を構成する究極的な存在は精神的なものであるとする考へとは、二項対立として論じられることにはならなくなつた。

唯物論と唯心論の中間にエネルギーといふ、精神と同様に目に見えないものが存在することになつて、唯物論だけでなく、唯心論もまた破綻することになる。昔から言はれてきたアカシックレコードとか、今では、ゼロ・ポイント・フィールド仮説なども含めて、宇宙創世からのすべての情報の記憶が存在するとすれば、それは唯物論でもあり唯心論でもあり、対立するものとはならないのである。

これは、宗教、哲学などにも大きな影響を与へたのであるが、そのことを語る者は少なかつたし、宗教者や社会学者などは、「物言へば唇寒し秋の風」として口を噤んだ。

いづれにしても、マルクスの弁証法的唯物論と史的唯物論は、その死後において、原爆によつて破壊されたのである。

マルクスは、労働を人間と自然との「物質代謝」を規制し制御する行為とした。しかし、この定義は初めから成り立たないのである。「代謝」といふのは、生体内で古い物質が化学的变化によつて新しい物質と次々に入れ替はる概念であるが、これはエネルギー転換が生じてゐることなのである。

ところが、あへて「物質代謝」としたこととは、唯物論であるために、エネルギーを否定しないし軽視してゐることになる。専ら「物質」だけに限定した考へである。

現在の経済学は、単純な唯物論から脱却して、目に見える物質だけでなく目に見えないエネルギーも商品として認識してゐる。商品とは、財とサービス（用役）であるとして、財とは物質のことであり、サービスとはエネルギーのことである。

現代の資本主義経済学は、商品として、物質（財）とエネルギー（サービス）を同列一体のものとして捉へる現代科学の立場を取り入れてゐるのである。

マルクスが労働を物質代謝したことから、主婦の家事労働や教師の教育活動、さらに、慈善運動、奉仕活動その他物質の代謝を伴はない一切のサービス活動は労働には含まれないことになる。

また、観光や信仰の目的などのため、神社仏閣、博物館などを見学や拝観したい者から入場料や拝観料を取ることは、物質を見せるだけであるから、見せる側の行為は労働でも物質代謝でもない。いはゆる不労所得である。

働く者は食ふべからず、として労働のみを重視したマルクスは、この不労所得を解明しない。否、解明不可能だったのである。

マルクスを信奉したはずの日共は、京都市の古都税条例（拝観料に税金を課す条例）の導入に徹底的に反対した。拝観料収入には税金はかからず、時の権力者からタダで貰つた広大な土地の固定資産税等は免除され、夜になると、シャッポを被つた生臭坊主が祇園界隈などを濡れ手で栗の拝観料収入を使って遊興する。そんな坊主の退廃状況は、信長によつて比叡山の焼き討ちをされた坂本の町と同じである。

そんな宗教法人の特別待遇を日共の京都本部は断然支持したのである。なにがマルクス主義か！働く者が満足に喰へず、働く者がタラフク喰つてゐる、こんな状況を容認することの恥を知れ！と、当時は果敢に批判して政治活動をしてきた立場からすると、日共はすでにマルクス主義ではなくなつたといふ実感があつた。